

主 題：私たちは芳しいキリストの香り
 聖書箇所：コリント人への手紙第二 2章14-17節

救い主 主にこの身捧げん 贖いのため 主に給いし
 主こそ我が君 我が王なり 今よりひたすら 主のために生きんと

皆さん、本当に心からこの賛美をなさいました？我々は今大変重要なことを賛美したと思います。イエス様の十字架を見上げて、私たちはすべてを捧げてこの主に従い続けていくのだと。もし私たちが心からそれを賛美していないとしたら、それを聞いておられた主がどうお思いになるかです。願わくば私たちがそのように歩んで、主の栄光を現すことができればと思います。私たちはこのように生きるべきであり、このように生きるようにと私たちはこの救いにあずかったのです。

きょうは2コリント2：14から、勝利者として生きたパウロというひとりの霊的な信仰者の生き方を一緒に見ていきたいと思えます。というのは、彼が歩んだように私たちは歩むことができるからです。どんなことがあっても、その中で彼が勝利者として生きたように、あなたも私も生きることができるのです。問題はどうすればいいのか、もっと言えばあなた自身がそのように生きるかどうかです。

詳しい説明をするまでもありませんが、皆さんパウロという人物のことをよくご存じです。彼の人生を振り返ってみるならば、間違いなく迫害と苦難の連続であったと行うことができます。2コリント1：8-9の「兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。」というパウロ自身のことばを聞くだけでも大変なクリスチャン生活を過ごしていたことがわかります。イエス様を信じたらずべてがバラ色で問題から完全に自由とされるかということ、現実とは違っています。主に対して忠実に歩もうとする者たちはみんな迫害を受けると。大変な苦しみ、大変な困難を経験することはもう皆さんおひとりひとりが経験しておられることです。

2：4を見ると、「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。」とも書かれています。日本語で「大きな苦しみ」と訳されているのはさまざまな迫害のことです。「心の嘆き」というのは彼自身が経験していたさまざまな苦悩、悩みのことです。2コリントにはパウロが具体的に、肉体的にどんな迫害を受けていたのかが書かれています。例えば11：23には「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。」とあります。お聞きになったように、牢に入れられたことも一度や二度ではなかったのです。「また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした」と。パウロの肉体がどれほど傷ついていたのか想像できます。

しかし、パウロは迫害を経験していただけではなかったのです。外部から来る迫害とともに精神的な苦痛というものを彼は経験するのです。きょうのテキストの前の2：12-13を見ると「私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき」、トルコの西北西、昔はトロイと言われたところですが、トロアスに行った時、「主は私のために門を開いてくだ」さった。福音宣教のために神が門戸を開いて機会を与えてくださったという話です。そして13節に「兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、」彼は「マケドニヤ」、ヨーロッパに向かったとあります。「テトスに会えなかったので、心に安らぎが」なかったというのは、パウロはコリント人への第一の手紙をテトスに託し、彼がコリント教会に持っていったのです。1コリントは大変厳しい手紙です。前回我々が見たように、この教会の人々は信仰的に大変幼稚で、さまざまな罪がこの教会の中にありました。そこでパウロは、彼らとその罪から離れて主に喜ばれる歩みをしていくようにとこの手紙を送ったのです。だからパウロとしたら、その手紙を受け取り、その手紙を読んで、その手紙を学んだ者たちがどう悔い改めるのか、当然その結果を聞きたいのです。そして、本来ならばテトスとそのメッセージを携えてこのトロアスに来るはずだったのに、まだ彼は来ない。パウロの中では一体何が起こったのかと考えるのです。ひょっとしたら、このメッセージを聞いたコリントの人々が彼を迫害するようになったのか、捕らえられて出て来ることができないのか、そういったことを考えて「心に安らぎが」なかったと記したのです。

パウロはさまざまなところに遣わされ、伝道して教会を建て上げていきました。パウロの話を知れば、そういった信者ひとりひとりのために彼が大変心を配っていたこと、2コリント11：28の彼のことばを使えば「日々私に押しかかるすべての教会への心づかいが」とありますが、つまり彼は人々の顔を思い出しながら、彼らのことを祈っていたのです。成長しているかな、神の前を正しく生きているかな、あの時に経験していたあの困難に勝利しているかなと、さまざまなことを考えていた。まさにパウロは宣教

師であり、牧師だったのです。その愛する羊たちのことを大変心にとめていたのです。

また、2コリント、1コリントを見ると、この教会の人々からのさまざまな非難をパウロは経験しています。例えば1：15に、パウロがコリントを訪問する計画を変更したことへの弁解が記されています。また1コリント9章を見ると、パウロの使徒職を疑っている人たちのことが記されています。イエス・キリストの復活の目撃者でなければならないという使徒になるための条件がありました。彼は本当に使徒なのかと。パウロは使徒だと神によって召されているが、それを疑う者たちがいたのです。ですから確かに外部から来るさまざまな困難、迫害とともに、彼の心の中にもいろいろな思いがあったことを我々見て取ることができます。

☆ 困難に勝利する方法

それを踏まえた上で、きょうのテキスト2コリント2：14を見てください。13節は「テスに会えなかったので、心に安らぎがなく、そこの人々に別れを告げて、マケドニヤへ向かいました。」とあります。そして14節で「しかし、神に感謝します。」という話になるのです。本来ならば、マケドニヤへ向かった後どうなったかを聞きたいのです。しかし、実際その2：13で終わった話は、2コリント7：5から「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、」と話が始まっていくのです。そうすると、この2：14ー7：4までの話は、まさに挿入されているのです。続けてマケドニヤの話をしてよかったのに、パウロがなぜこんなことをしたのか——。今説明したように、2コリント1ー2章の初めまでを読んでいくと、パウロ自身が大変な迫害を経験し、また内面的にも大変な困難や苦しみがあって失意の中にいたと書かれています。でもそこで話を止めるのではなくて、彼を苦しめるさまざまな問題が彼を追い詰めたけれども、神に不平不満を言うのではなく、彼はそのような大変な状況の中で勝利を得たとパウロは言うのです。その証がここに入っているのです。大変な失意の中にあっても、我々信仰者は勝利できることをパウロはまず教えようとするのです。

2コリント1：3を見ると、「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。」、パウロはここで神様をほめたたえています。というのは彼にはある確信があったのです。4節「神は、どのような苦しみのおきにも、私たちを慰めてくださいます。」、パウロの中にはこの確信があったのです。どんな時でも神が私を慰めてくれる。そこで問題がなかったのではないのです。恐らく私たちが経験したことのない大変な問題を抱えていながら、彼はこの確信に立っていたのです。その結果、7：4を見ると、「私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」と。「問題が解決したから喜んでいます」ではないのです。「どんな苦しみの中にあっても」、その真っ只中であってパウロはその中でも喜びに満ちあふれることを経験していると言うのです。現実には厳しいものでした。つい神様に愚痴を言いたくなるような状況、神を疑ってしまいたくなるような状況にあって彼を支えたのは、神がどのようなお方であるのかという神への確信です。その確信を持って歩んだ時に、神は確かに彼のうちに働いてその状況は一変しなくても、同じ状態であったとしても彼の心が喜びにあふれるという体験をパウロはしています。

みことばが私たちに教えてくれるのは、あなたも同じことを経験することができるということです。パウロが経験したのはパウロだけに与えられた特別な祝福ではなく、神を信じるあなたにも同じことが約束されています。だから私たちが知りたいのは、どうすれば私たちも彼と同じように勝利者として歩んでいくことができるのかです。状況に押しつぶされてしまったり、困難や苦難によって苦しめられていても、その中で神を見失ってしまうようなことがないように、どうしたらいいのかをパウロは我々に教えてくれるのです。

1. 神を見上げる：感謝する

きょうのテキストを見てください。パウロが困難な中でしたことは、問題ではなくて神を見上げることです。なぜかという、14節は「しかし、神に感謝します。」ということばで始まっています。まさにこれこそが我々が勝利者として歩んでいくための鍵だと言うのです。

1) 感謝する理由

そして、その後パウロは感謝する理由を書いています。なぜ感謝できるのか。それを私たちは見て行くのですが、「神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。」(2：14b-16a)、「行列」と「かおり」の話が出ています。パウロはここでローマの凱旋を引き合いに出して、このメッセージを読者たちに伝えようとするのです。ウィリアム・バークレーはこう言っています。「ローマの将軍に与えられる最高の栄誉は凱旋、パレードであった」と。数ある将軍たちの中でみんながみんな経験したわ

けではない。というのはこのパレードを経験するためには、少なくとも5,000人以上の敵を倒し、ローマの領土が確実に拡大するという二つの条件があったのです。こういった条件にかなったならば、この凱旋が約束されたのです。また、どんなパレードかを知らないと、パウロがここで言いたいことがよくわからない。もう一つ言うと、ローマの領土、またローマの支配している国々の中では、このパレードはみんなが知っていることでした。私たちが知らないだけです。この手紙が送られた人々は手紙の言わんとすることがよくわかったのです。それゆえにパウロはそれを使って大切な真理を伝えようとするのです。

さて、このパレードがどんなものだったのか、ウィリアム・バークレーという信仰者が私たちに非常にわかりやすく説明してくれます。ローマの町を通過して、カピトリヌス（ここにはローマの神殿がありました）の神殿が置かれているところまでの凱旋パレードです。最終的にはこのカピトリヌスという神殿まで行くのです。まずパレードはどのような順番に並んでいるかという、一番最初には役人が、そして上院議員たちがパレードします。その後にはラッパを吹く者たちが続き、その次に征服されたところからの戦利品が並んでいきます。例えばローマ皇帝ティトゥス（在位は79年～81年）がエルサレムを征服した時の戦利品は、七つの枝を持つ食台、備えのパンを乗せる黄金のテーブルに幾つかの黄金のラッパで、それらがエルサレムからローマの町に運ばれ、みんなの前に紹介されるのです。その後は征服地の絵と征服された砦と船の模型、いけにえにされる白い雄牛が続きます。そしてその後、捕らえられた敵の王族や君主、指導者や将軍が鎖につながれて行進します。鎖につながれている王族や君主はこの後牢に投げ込まれ、恐らくすぐに処刑されていきます。この捕虜たちの後には鞭を持った囚人係がいて、これに豎琴を手にした音楽師たちが続いていきます。

その後には芳しい香りを放つ香炉を振りながら歩いている祭司たちです。今でもイスラエルに行くとさまざまなところにそういう人たちがいます。小さな香炉に香を入れて、そこから煙があふれ出た状態でそれを振りながら歩き回るので、行進の時もそうでした。これらの人々が通った後、最後に出て来るのは勝利をおさめた将軍です。彼は馬に引かせた戦車の上に立ち、黄金の棕櫚の葉を刺繍した紫の上着を着て、その上に黄金の星がきらめく、紫の外套を羽織っているのです。そしててっぺんにローマの鷲がついている象牙の笏を手に持ち、その頭上にはひとりの奴隷がジュピターの冠を捧げています。将軍の後にはその家族の者たちが馬に乗って続き、そしてこのパレードの最後には、軍隊があらん限りの飾りを身につけて勝利の叫び、万歳を叫びながら行進していくのです。歓呼する群衆に埋まったローマの町を飾りや花輪をいっぱい身につけて凱進行進が進んでいく、このような光景は一生に一度見られるかどうかという大変な日であったと書かれています。

皆さん、我々がしなければいけないのはその光景なのです。この手紙の読者たちはその光景をちゃんと心得ていました。ですから、パウロが言いたいことを彼らは理解できたのです。その上で、なぜパウロが大変な問題を抱えていながら、神に感謝することができたのか、今から四つの感謝の理由を見ていきます。

(1) 主から勝利が与えられたから

一つ目の理由は主から勝利が与えられたからです。主の勝利が与えられたことを覚えて感謝をすることです。というのは14節に「勝利の行列に加え」る、「導」と書いてありました。これは完全な勝利のある人にもたらすということです。もちろんここには一体何に対する勝利なのかというのは詳細に書かれていません。完全な勝利を得たのだという話をしているのです。しかし、私たちはみことばから主イエス・キリストが一体どのような完全な勝利を得たのかを知っています。

① サタンに対する勝利

まずイエス・キリストはサタンに対して完全な勝利をおさめられた。十字架での身代わりの死、そして死よりのよみがえりによってサタンに勝利された。ヘブル2:14には「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、」と書いてあります。主イエス・キリストがお生まれになって、十字架で死ぬことによって、このサタンを、その力を滅ぼしたと。

② 罪に対する勝利

また同時にみことばは罪に対して主イエス・キリストは完全な勝利を得られたということを教えます。使徒26:18「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。」とあります。主イエス・キリストはイエスを信じるすべての人をサタンの支配から神の支配へと移り変わらせることができる。そしてその人たちに罪の赦しを与えることができる。というのはイエス・キリストのその勝利というのは、この罪に対する勝利でもある。だからイエス様を信じる人は罪の赦しを得ることができると。

③ 死に対する勝利

また、イエス様は死に対する勝利も得られました。パウロが言うように「『死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。……神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。』、1コリント15：55と57です。

ですから詳しい説明をするまでもなく、イエス・キリストは勝利者だと。サタンに対する勝利者であり罪に対する勝利者であり、死に対する勝利者であると。このすべてに勝利をおさめられた将軍。まさにそれは主イエス・キリストの御姿を現しているのです。敵に対して完全に勝利されたと。そして私たちはというと、このすばらしい将軍をたたえながら後について来る者たちなのです。私たちは鎖につながれた捕虜として引いていかれる者たちではないのです、我々はこの勝利をおさめた方をほめたたえながら生きる者たちです。それが我々信仰者なのです、それがあなたなのです。ですから、パウロはいろいろな困難を経験しても、私は神によって勝利をいただいた、私は罪の赦しをいただいた。私はきょう死んでも行くところが決まっていると。私たちに与えられた大きな希望でしょうか？きょう第一礼拝を終わってお帰りになる時に、私たちの地上での生活が終わった後、行くところが決まっているというのは本当に感謝ですねとある姉妹が言われた。私は死んでも生きるのだ、私には永遠のいのちが与えられ、罪の赦しをいただいた。だったら私たちは少なくともその感謝を現すことです。パウロは問題がいっぱいあった中でこの神様が下さった祝福を覚えるのです。そして彼は私は勝利の行進に加えられたと、その神に感謝をするのです。

(2) 主の導きを与えられたから

二つ目の理由は、主の導きを与えられたからです。先ほどお読みしたように「私たちが導いてキリストによる勝利の行列に加え」たとあります。パウロは救いにあずかった後、自分の生活を主が導いてくださることを確信しています。先ほどお読みした2コリント2：12「私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、」とあります。先ほども説明したように、神が導き、神がその福音宣教の扉を開いてくださった。この話はルカがもう少し詳しく記しています。使徒16：9-12を見ると、パウロたちがどのようにして神によって導かれてきたのかが書かれています。16：6-10「それから彼らは、アジャでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。それでムシヤを通過して、トロアスに下った。ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私たちに助けてください。』と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤに出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したから」と。この当時まだ新約聖書は完成していません。ですから神様は特別な方法で、導きを与えられた。今の私たちは違います。神は幻をもって私たちにみこころを示すのではない。神のおことばを通して私たちにみこころを教えてください。

こうして確かに神はパウロたちを導かれた。そしてマケドニヤに行くことが神からのものだということを確信して、この後パウロたちはヨーロッパに入り、ここからヨーロッパ伝道が始まっていくのです。お気づきになったように、神はちゃんと人々を導くのです。もしあなたも日々の生活において神のみこころに従って生きているなら、つまり神のみことばに従って罪を告白し、みこころに従って生きているならば、神はちゃんとあなたを導いてくださる。

マッカーサー元帥が日本の人々はやっと思信的に見ても心を開いているから、今、日本に1万人の宣教師を送るべきだと言った。残念ながら1万人の宣教師は来ませんでした。でもその呼びかけに、もっと言えば神の導きに従ってたくさんの宣教師たちが来たのです、この地に、そして仙台にも。そして彼らが福音を語ることによって私たちはこの福音のメッセージに触れることができたのです。しかし、エストライク先生が日本に来た時、恐らく戦後すぐに日本に来た宣教師たちの苦労というのは多分私たちに理解できないと思います。日本にずっと生まれ育った者たちと繁栄していたアメリカという国からここに来た人たち、しかも戦後すぐの日本です。エストライク先生の一人のお嬢さんの証を聞きました。子どもながらも日本という戦争で戦った国にやって来て、自分たちがどういう目に遭うかという不安があった時に、朝早く起きてみると、エストライク先生がひざまずいて祈っておられたのを見て、彼女は大丈夫だ、お父さんは父なる神様に祈っておられると。こうして多くの人たちは神のみこころに従って出て行きました。

私の知人も大変危険な国でイエス・キリストの福音を語っています。なぜ彼らがそういったところに行ったのか——。神のみこころだからです。なぜ私たちがここにいるのか、神のみこころだからです。おととい仙台でブローマン先生の息子さんと話をした時に彼はこう言いました。私はこれまでは韓国で働きをしていて、今ミャンマーにいます。主が導かれるところに私たちは出て行きますと。もう少し生活水準がいいところとか、もう少し快適な生活ができるところとか、もう少しおいしいものがある

ところにではなくて、主の導きに従っていく、それが我々です。我々の主である方が言われることに我々は従うのです。彼がおもしろいことを言った。雲が動けば私たちは動く。あのイスラエルの民です。雲がとどまればそこにとどまり、動けば彼らはそこについて行くのです。そんな信仰生活を皆さんは歩んでおられますか？クリスチャンとして何となく歩んでいる。そんな歩みではないですか？パウロだけではないのです。私たちの宣教師だけではない。我々イエス・キリストによって救われた者たちは、救ってくださった主に従うというすばらしい祝福のもとに生かされているのです。年齢や性別、教育があるかないかも関係ない。神が求めておられるのは神のみこころに喜んで従う人がいるかどうかです。そういう人々を神は使ってこられたのです。誰かから強制されてでもない、神に対するその愛が自分たちを押し進めていって、そしてこの神様の導かれるところに行きたい。今感謝なことに世界の至るところでそういう人たちがあふれています。今でも同じように神はそういう人々を用いてくださっている。パウロがさまざまな困難に遭遇した時に彼を支えたのは、神が私を導いてくれているという真理です。神が私を置いてくれている、我々はそれに従うしもべ、奴隷にすぎないのです。ですからパウロは何があってもギブアップしなかった。なぜなら神が導いてくれたからです。神が行けと言うまで彼はそこにとどまったのです。

(3) 主の働きが与えられたから

三つ目に彼が感謝をした理由は、主の働きが与えられたからだと言います。14節に「至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。」とあります。パウロに与えられた務めは「キリストを知る知識のかおりを放」つことでした。これも先ほど見たように、ローマ軍の勝利の行進、凱旋を例として話しています。勝利を得たローマ軍は捕虜を引き連れてローマの町を行進していきます。その時に祭司たちは香を焚いているのです。パウロはここでこの香は「キリストを知る知識のかおり」であると言っています。この「知る知識」と訳されていることばは、キリストを知る知識ですから、キリストについての真の知識、イエス様が一体誰なのかということです。そのことを「放って」くれる、つまり知らせるとか、紹介するとか、明らかにするということです。ですからまず最初に14節でパウロが言っているのは、我々信仰者に与えられた務め——イエス様が一体だれなのかを人々の前に明らかにする務めが与えられたということです。福音宣教です。

そして、パウロはその与えられた務めを果たしていました。使徒20：24に「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、パウロにとっては神のみこころに従うことの方が自分のいのちよりも価値があると言うのです。彼は神に従って行きたいのです。神のみこころをなしていきたいのです。その結果、自分が死を迎えたとしても彼は喜んだのです。なぜなら彼にとって最も大切なことは神に従うことだからです。そこで彼はここに「至る所で」とあったように、確かに「至る所で」福音宣教を行うのです。人々は彼を見てペストのような存在だと言いました。どこへ行ってもキリストの福音を語ったからです。どこへ行ってもイエス・キリストの真理を伝えたからです。

① 動機：神に喜ばれたい

動機も書いてあります。15節に「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおり」だと。「神の前にかぐわしい……かおり」、これはまさにいけにえを捧げた時にいけにえを捧げた人々が望んだことでした。このいけにえを神様が喜んで受け入れてくださるかどうか、それが彼の関心でした。ですからパウロはこうして彼自身の働きに対する動機を言います。「神の前にかぐわしい」、つまり神が喜んでくださる捧げ物でありたい。この働きをなすに当たって、神に喜んでいただきたい、それが動機だったと言うのです。パウロは我々クリスチャンの生きがいというのは神に喜んでいただくことだと言うのです。

1テサロニケ2：4には「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」とあります。パウロがこの福音宣教をした時に、彼が考えていたことは人がどう思うかではなかったのです。彼が考えていたことは主がどう思われるか、私のしていることが主に喜んでいただけるかどうか、そのことだけだったのです。「私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語る」と言っています。彼がどんな思いを持って生きていたのかわかります。神様に喜んでもらいたい、神だけが喜んでくださったらそれでいい。人から誤解されようと、人から非難されようとどうでもいい。神が喜んでくださることが彼の生きがいでした。その動機を持って彼はこのメッセージを語るのです。ですからパウロはこの神からの福音のメッセージを絶対に曲げようとはしませんでした。この真理をそのとおりに語ったのです。同じことが2コリント4：2にあります。「神のことばを曲げず、真理を明らかにし、」、なぜならこれは神のことばだからです。

② 二つの結果

ではパウロがこの神様の真理を正しい動機で語った時にどういう結果が起こったのか、16節「ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。」、つまりこの福音を正確に宣べ伝えた時に二つの結果が出るという話です。ある人々はこの福音のメッセージを聞いてそれを心から受け入れるし、ある人たちはそれを拒むと言うのです。これも先ほどから話しているように、ローマの凱旋から我々は考えるべきなのです。凱旋する時に、祭司たちは香炉を振っています。そうすると、その香りが周りの人たちに届くのです。この香りは何を意味するか——。鎖につながれてこれから処刑される者たちにとっては、この後自分たちに起こることが現実のものだということを彼らに悟らせるのです。もう間もなくすると我々は死んでしまう、殺されてしまうということです。ところが勝利している者たちにとってこれは我々は勝利をおさめたという喜びの香りなのです。同じ香の香りでも、捕らえられている者たちにとってはパウロが言うように「死から出て死に至らせるかおり」だと。その香りは自分たちが死に近づいていることを明らかにしている。でも救われた者たちにとっては、我々はこのイエスによってこんなすばらしい祝福にあずかった、いのちにあずかった、まさに彼らが喜びの声を発しながら行進した時の香りです。福音のメッセージを正確に語っても、こういった2種類の反応があるのです。その福音のメッセージを心から歓迎する者と、それを歓迎しない者たち、そのどちらかです。

③ 神に委ねる

そこで福音宣教の結果というのは、全部神にお任せすることです。パウロの証の中で、ではパウロは何人の人に救いをもたらしたのかとか、何人の人が救われたということに全然言っていません。パウロが喜んだのは、この福音というすばらしい救いのメッセージを語る務めを神からいただいたことを喜んでいたので。それゆえに彼はそれを正しい動機で行っていきたくて願っていたのです。私たちが福音宣教をする時に覚えなければいけないのは同じことです。神はあなた福音を正しく正確に語ることを求めているのです。我々が専心専念すべきことは福音の真理を正確に妥協せずに語ることです。もちろん我々はそのメッセージを聞いた人々が救いにあずかることを祈りながら語ります。でも結果が自分たちの期待していることではなかったとしても失望してはいけないのです。神は私たちにこの福音を語るというすばらしい特権を下された。パウロにとって福音宣教というのは重荷でも義務でもなかった。パウロにとってこれは特権だったのです。なぜなら、私たちはいろいろな知らせを聞いたなら誰かに伝えたい、そういう思いが働きます。大体のニュースはどうでもいいようなニュースです。私たちはすべての罪人が聞かなければならないメッセージを神から託されたのです。そのメッセージを語るという特権にあずかっているのです。確かに多くの人たちはその福音のメッセージに耳を閉ざしてしまっ、心を閉ざしてそれに対して感謝をしないでしょ。でも我々はこれを語るという特権をいただいた者として、それを感謝しながら語っていく、それをパウロがここで証するのです。なぜならそれが神のみこころであり、それが神が喜んでくださることだからです。

悲しいことに、今キリスト教界の中で神様が語れというメッセージを語ったら、多くの罪人がこの救いから遠ざかってしまうだろう、狭い門から入れなどと言ったら、みんな救いから遠ざかるだろう、だから信じやすいメッセージを語ろうとしている。誰を見てメッセージを語っているかです。先ほども見て来たように、パウロは人を喜ばせようとしてではなくて、「私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語」ったのです。でもそういう人を喜ばせるようなメッセージがあたかも神の真理として語られているという現実があるのです。あなたはそうであってははいけないと言うのです。どんなにこんな話を聞いたら人々が遠ざかると思ったとしても、神の真理を語れと言うのです。それがあなたや私に与えられた特権なのです。それが神が望んでおられることなのです。

もう一つ見ていただきたいのは、この14節で「私たちが導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおり（福音）を放って」くださる、明らかにしてくださるのは主語が誰かを見てください。神でしょう？神があなたや私を使ってくれるのです。神があなたや私をこのような働きに用いてくださるのです。問題はあなたがそれを望んでいるかどうかです。主よ、私を使ってください、この働きに用いてくださいと。もちろんみんなひとりひとり違う賜物を持ち、その賜物を生かすのです。しかし、この福音を伝えるという特権は我々信仰者すべての者に同じように与えられているのです。

(4) 主の恵みが与えられたから

最後に、パウロが神様に感謝を捧げた四つ目の理由は、主の恵みが与えられたからなのです。17節で我々は既に見たのですが、そのことを我々にパウロは教えます。16節の最後に「このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。」と書いてあります。主が与えてくださったすばらしい救いを伝えるという務めにふさわしい者は一体だれかと。なぜこんなことを言ったかということ、今もお話したように福音を正確に伝えていない者たちの存在があるからです。そういう人たちがこの当時もいたし、今も

いるのです。パウロが言うように「神のことばに混ぜ物をして売るようなこと」をしていたのです。神の真理に混ぜ物をするのです。先ほども言ったように人々が信じやすいようにとか、人々が聞きたいことを語るとか、そのようなことをしていたのでパウロは一体誰がこの務めにふさわしいのかと言うのです。どんな人がふさわしいのかをパウロが教えてくれます。神の真理を正しく妥協せずに語る者たちです。ですからパウロは偽りの教師たちの働きを説明した後、今度はパウロたちの働きについての説明をします。

① 神のメッセージを正確に語る

もう既に学んだところですから、簡単に説明するだけにしますけれども、まず、神から与えられたメッセージを正確に語るということです。17節に偽りの教師たちと同じことをしてはいけないのだと、「神のことばに混ぜ物をして売るようなこと」をしてはならないという話をした後で、「真心から」ということばが出てきます。つまり神のことばを正確に語れ、真理を語れということです。メッセージを正確に語るように。

② 正しい動機で語る

同時に、その神から与えられたメッセージを正しい動機を持って語りなさいと。この「真心から」ということばは、誠実という意味があります。また当然神様が与えてくださったこの務めに対して、我々はそれを神を愛するゆえに行っていくゆえに神のことばに混ぜ物をする事なく、神のことばを正しくそのとおりに、誠実に、神への愛を持って語っていきなさいと。

③ この働きを神が与えてくださったことを自覚しながら歩む

そして同時に神から与えられたこの働きを神が私に与えてくださった働きなのだとすることを自覚しながら歩むことです。あなたには全知全能の神から、出て行って私の福音を語れというすばらしい務めが与えられたのです。ですから、この務めは神ご自身から与えられたものだということをしっかり覚えることです。ゆえに私たちは、神への畏れを持ってこの働きをなすことが必要です。「神の御前で」と書かれています。私たちは人ではなくて神の目を意識しながらこの務めをなすのです。なぜなら私たちはこの方の前で私たちの働きのさばきを受けるからです。

④ 主の恵みによって成す

そして最後に、主の恵みによってそれをなしなさいと。「キリストにあって」と書いてあります。だからパウロはこう言うのです。あなたにはこのすばらしい務めが与えられた。神のメッセージを正確に語りなさい、正しい動機を持ってそれを語っていきなさいと。この働きを神から与えられたものだという自覚を持って、ゆえに畏れを持って歩んでいきなさいと。ただし、あなたがこの働きをするに当たって、間違いなく必要なのは神の助けです。だからパウロは「キリストにあって語る」と言っています。神の助けをいただきながら私たちはこの働きをなしていくのです。

パウロが困難の中でしたことは神へ感謝を捧げることです。なぜ彼が神に感謝することができたかという、神に対する信頼があったからです。神は私に勝利を与えてくださり、勝利の行列に招いてくださった。神様が私を導き続けてくださると。私に与えられたのは神の働きなのだと、神ご自身がその働きを下された。そして私はこの働きをなすために神の恵みをいただいていると。だから自分の力を信じて働いたのではなく、神の力を信じてその力に頼って働きをなしたのです。パウロは神に喜ばれることだけを願いとしてこの福音のメッセージを語ったのです。これが霊的な勝利者として歩んでいくための鍵だと言うのです。

そしてあなたがそのように歩むならば、私たちはかぐわしいキリストの香りを放つ者としてこの地上の生活を送っていくことができます。信仰者の皆さん、覚えてください。この福音を語るために私たちは救いにあずかったのです。この福音を語るために私たちは生かされているのです。そして神はあなたを通してこのすばらしいみわざをなしてくださる。パウロが歩んだように私たちも主よ、あなたの栄光のために、あなたのすばらしさが人々に明らかにされるために、どうか私を使ってほしいと。その時に私たちは主にみわざを期待できるのです。その時にどんなに多くの問題があなたを悩ましていようと、あなたはそれに勝利できると。なぜならあなたは問題ではなくて神を見たからだ。そこに解決があるのです。

あなたの生活は感謝にあふれています？それとも神に対する愚痴と不満にあふれています？我々が見て来たのは、実際に困難の中で喜びにあふれて生きた人物の信仰の歩みです。それはあなたや私にもそれが可能だからです。このパウロの模範にならってそのように歩んで行きましょう。神はそれを喜ばれ、そして神はそれを助けてくださる。